



タオケー

## タイの漁民と頭家

小河 久志 (おがわ ひさし)

総合研究大学院大学文化科学研究科

でも活躍する者が多い。

### 漁民は子分

しかし、頭家に対する村人の評価は一樣に低い。彼らと話をしている、たびたび聞かされたのは、取引のある頭家に対する悪口だ。「海産物の買値が町よりも安い。それなのに漁具の売値は高い。これじゃあ食べていけないよ」「海産物の選別(大きさやかたちなど)が厳しくてかなわない」といった経済にかかわるもの。あるいは、「頭家はしよっちゅう街に遊びに行っている」「頭家の子どもは働かず、高校や大学で勉強している」といった裕福さへの羨望などである。なかには、いつ清算できるかわからない負債を抱える将来への不安から、「わたしたちには自由がない」「我々は頭家の子分だが、実際には奴隷だよ」とさえ言う者もいた。

家には、操業資金と海産物の販売先を提供することで、漁民が継続して漁業をおこなうことを可能にするなど、搾取者にとどまらないさまざまな役割があることも、また事実である。ところが、そうした点は無視され、マイナスの側面のみが外部の機関によって強調されることになってしまった。頭家のお宅にお世話になっていたわたしもまた、漁民を搾取する存在として彼らを見ていた。

### 緊急時の被災者支援

ところが、二〇〇四年二月二十六日にインド洋津波が起きたことで状況は変わった。わたしが滞在した村にも津波は押し寄せ、多くの漁民は漁船や魚網という生活の糧を奪われた。しかし、国やNGO組織からの支援はなかなかやってこなかった。こうしたなかで、支援が届くまでのあいだ、漁民の生活を支えたのが頭家だった。彼らは、当面の生活費として手持ちの現金を傘下の漁民に与えたり、怪我をした者を町の病院に送迎したりした。つまり頭家は、緊急時の被災者支援をおこなったのである。

たしかに、こうした頭家の行為は、漁民を傘下に繋ぎとめておくためという見方もできる。しかし、頭家も津波の被害を受けていた。彼らもまた、漁具被害にともなう長期間の操業停止と漁獲高の減少、海産物の腐敗や価格低下、漁民への貸付資金の焦げ付きに見舞われるなど、厳しい経営環境に置かれていたのだ。しかも、零細漁民をおもな対象にした政府の支援方針や村長による支援金の不正分配のために、わずかな額の支援金しか受け取ることができなかった。それでも彼らは、漁民が郡や県の役場に支援金の申請をする際の交通や取り次ぎの便宜を図るとともに、関係機関に赴き更なる支援の依頼を精力的におこなった。その結果、村人のあいだから頭家への謝辞が聞かれるようになった。それは、津波襲来前にはほとんど耳にしたことのないものであった。津波という予測不可能な事態が起こったことで、奇しくも、搾取者とは正反対の保護者としての性格があらわになったのである。

### 村の有力者「頭家」

タイの多くの漁村には、頭家とよばれる海産物を取りあつかう仲買人が住んでいる。生産地の仲買人として海産物流通の末端を担う彼らは、貧しい漁民に漁船や魚網といった漁具や操業資金、ときには生活資金を前貸しすることで、水揚げを独占的に買い占めてきた。

わたしが滞在した南部にある人口一〇〇

〇〇人程度のムスリム漁村にも、四人の頭家がいた。彼らは、経営規模やあつかう海産物の種類に違いはあるものの、総じて他の村人よりも高収入である。村では数少ない自動車や洗濯機といった高級消費財も所有しており、富裕層に位置している。また頭家は仕事柄、村外に知人が多く、政治や経済にも通じている。このため、複数の村を統括する区の行政委員をはじめ、村の要職につくなど政治面

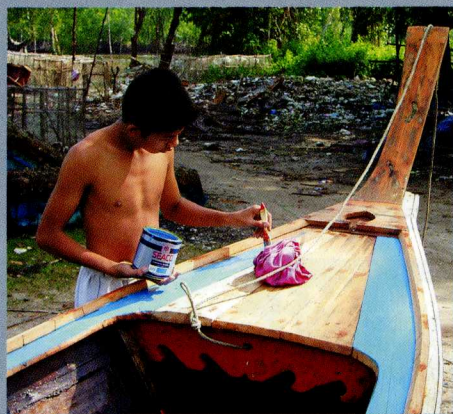


カニを選別する頭家の妻。海産物を種類や大きさにより細かく選りわけ、値段を決める

領収書に水揚げ代を記入する頭家と、それを待つ傘下の漁民



漁船にペンキを塗る漁民。船の補修にかかる費用も頭家からの借金でまかなわれる場合が多い



網から魚を取り外す漁民たち

津波から三年近い歳月が過ぎた今、漁民の日常生活は落ち着きを取り戻した。津波により操業の危機に追い込まれた頭家も、廃業した一軒を除けば、ほぼ津波前の状態にまで経営を回復している。こうしたなかで、頭家への恩義は忘れ去られ、再び、搾取者として敵視されるのだらうか。利得の追求と、漁民との倫理的な人間関係との板挟みにある頭家。彼らに対する漁民の評価は、これからも揺れ動いていきそうだ。